

# 禪林寺阿弥陀堂について

平井俊行・小宮 睦・稲田朋代

## 1. はじめに

禪林寺は、京都市左京区にある古刹で、東山山系の麓、南禅寺の北に位置する。現在は浄土宗西山禪林寺派総本山であるが、一般的には永観堂と呼ばれ、紅葉の名所として知られている。京都府教育庁文化財保護課では、この禪林寺の建築を平成16年度に京都府指定・登録文化財調査の中で取り上げ、約1年間現地を外観や内部さらには関係する古文書等の調査を進めた。その中で阿弥陀堂は、慶長2年(1597)に大阪の四天王寺で曼荼羅堂として建てられた建物を、慶長12年(1607)に当寺に阿弥陀堂として移築したものであることが確認できた。

京都府内の国宝・重要文化財建造物の中にも、移築されたものが多く存在するが(第1表)、ほとんどはその用途を変更せず用いられるものが多い。また建立からわずか10年後に移築していることも特異な点である。さらに建物にはたくさんの痕跡があり、四天王寺にあった当時の曼荼羅堂の復原平面図等も推定できる点で貴重なものであった。

そこで、禪林寺の阿弥陀堂について、その歴史的な価値についてまとめることとする。

## 2. 禪林寺の創立と沿革

禪林寺は、空海の高弟真紹(797~873)が、9世紀中頃に藤原関雄の山荘を買い取り、大日如来などの五尊を安置したことに始まるとされる。貞観5年(863)には定額寺に列せられ(日本三代實録：貞観5年9月6日)、真言密教の道場として栄えた。

延久4年(1072)に東大寺の永観(第7世：1033~1111)が入寺して、境内に東南院(後に聖衆来迎院若しくは無量寿院)を建立し、念仏道場として知られるようになった。その後同じ真言宗の珍海(第10世：1091~1152)、静遍(第12世：1166~1224)、法然の高弟で浄土宗西山派の派祖、証空(第13世：1177~1247)が入寺し、次第に浄土宗寺院となっていく。

文永元年(1264)には、後嵯峨上皇が禪林寺南に離宮禪林寺殿を造り、正応4年(1291)には、龜山法皇が禪林寺殿を寺とし、南禅寺を開創する。

その後、応仁の乱で壊滅的な打撃を受けたが、第29世在空(1497寂)以後数代にわたって復興され、第36世智空(1529～1586)にいたって勸学院を設置し、浄土宗本山寺院の基が築かれた。元和元年(1615)には、光明寺(長岡京市)とともに浄土宗西山派本山であることを正式に認められ、江戸時代を通じて多くの学者を輩出するなど寺勢を誇った。

現在の伽藍は、第37世果空(1623寂)の代である桃山から江戸時代前期に整ったとされる。『禅林寺誌』によると、文禄5年(1596)に鐘楼、慶長5年(1600)に祖師堂(御影堂)、その他鎮守社等を建立したとある。

また、第38世頂空(1618寂)の代の慶長12年(1607)には阿弥陀堂を建立した。その後、寛永4年(1627)に方丈が再建されたほか、鐘楼〔宝永4年(1707)〕、中門〔正徳3年(1713)〕、御廟〔明和3年(1766)〕が江戸時代後期までに再建された。

『都名所図絵』〔安永9年(1780)〕をみると、伽藍は、本堂(阿弥陀堂)と祖師堂(御影堂)が境内一段上がったところに並んで建てられている他は、現在と概ね同じである。その後、文政13年(1830)に方丈前の勅使門が再建された。

明治4年(1871)の『寺地画図』においても、祖師堂と庫裏東側の書院、伝授堂等をのぞいて現状と一致する。現祖師堂(御影堂)は、大正元年(1912)にほぼ同位置の地盤を掘り下げ、下の段に再建されたものである。前祖師堂は、宝暦9年(1759)に再建されたものであったが、現在下京区の上徳寺に移築されている。境内はこの大正年間に大きく整備され、堂宇を繋ぐ廊下、諸堂の改造、画仙堂〔大正3年(1914)〕等の新築が行われた。その後、境内奥の中腹に建つ多宝塔が昭和3年(1928)に、総門を入った南の図書館〔昭和5年(1930)〕が建立され、現在に至っている。

### 3. 現存する阿弥陀堂の沿革

阿弥陀堂は、『本山禅林寺年譜録』によると、



第1図 禅林寺境内図

慶長12年(1607)に大阪の住人河村久目齋宗悦<sup>かわむらきゅうもくさいぞうえつ</sup>の寄付で四天王寺の建物を移築したものとあ  
る。この寺伝を裏付ける資料として禅林寺蔵、正安4年(1302)製作の  
絹本着色当麻曼荼羅図<sup>けんほんちやくしよくたいまんだらず</sup>(重要文化財)の裏書がある。そこには以下のように書かれている。

(前略)

慶長二年三月中旬肥後国観智房有靈夢之告携此變相来到摂州大坂於是河村氏齊入道式審聽  
此變相来由不克喜翫忽奉拜請之寄附天王寺別建小堂安之了矣

慶長二丁酉五月十七日

寄附檀那 尾州津嶋河村久目齊入道宗悦 逆修敬白

恭惟豊富朝臣秀吉公御息秀頼公者正考支干即上官太子御再誕敬天王寺御再興時有旨告曰今  
彼曼陀羅堂之地是上古食堂之跡也宜擇靈地而遷造之余承嚴命情思念之洛東聖衆來迎山者善  
惠一流之学席變相講相傳之本侍都殊於此變相因縁不少故達上聞再興本堂中央安御願(願か)  
本尊右壇掛此曼陀羅左壇掛豊国神像以為万世之靈宝焉 願主此功德 善及於一切與有縁無  
縁 俱皆成佛道

慶長十二丁未年六月二十三日

願主 河村久目夫婦敬白 修補作者 南都慶圓法眼

當山禅林寺在住頂空叔上人

隱居果空俊式上人

(後略)

肥後国萬善寺伝来の曼荼羅を、慶長2年(1597)に河村久目齋が小堂(曼荼羅堂)を建立し、  
四天王寺に寄進した。しかし、その曼荼羅堂の場所が、上古の食堂の跡であったことから、  
当寺を復興していた豊臣秀頼の命で、曼荼羅とともに禅林寺へ寄付されることになった。  
禅林寺では阿弥陀堂として改修が行われ、中央に木造阿弥陀如来立像<sup>もくぞうあみだによらいりゅうぞう</sup>(重要文化財)を祀り、  
北脇壇に当麻曼荼羅、南脇壇に豊国神像を掛けたとされる。

この移築の経緯は、慶長12年(1607)に久目齋が、曼荼羅とその堂を四天王寺から禅林寺  
へ寄進する旨の書状の中でも確認できる。

「河村久目入道宗悦書状」

今度東山禅林寺江寄進申処者、当麻新曼荼羅日本三幅之内也、同堂従天王寺引申之  
処、厥御本尊之御堂与一所立、御本尊永観豊国大明神之御影、御遷座在之様可仕之  
由、御内存承候間、雖斟酌存候、任両長老御意、一堂二造立仕寄進申事候、於末代  
子孫末孫違乱在之間敷候、為其一書如此候、恐惶謹言、

慶長拾貳丁未六月廿三日 河村久目宗入道宗悦(花押)

当住 頂空上人様 御隠居 果空上人様

『京都永観堂禅林寺古文書』より

さらに、慶長15年(1610)の寺から久目齋に宛てた書状でも以下の点が確認できる。

「禅林寺果空証状」

今度者曼荼羅堂為修理領田地式反畝、但毎年之納分八木四石也、従是以後之万タラ堂修理分者、代々住持、右 納分を以可被申付候間、永々可御心安候、即文証常住ニ預リ置申候、案紙其方へ令下候、尚御使吉左殿可有口上候、以上、

慶長十五年十一月七日 禅林寺 果空 (花押)

河村久目殿

参御宿所

『京都永観堂禅林寺古文書』より

一方、桃山期の四天王寺は、天正4年(1576)に織田信長と石山本願寺との合戦の際に罹災し、本格的な復旧ができないまま25年近く経過していた状況が当寺の古文書より確認できる。

「秋野家傳證文留」

天王寺寺中衆出入御使申ニ付無私曲上起請文前書之事

一天王寺寺法之儀、我等御使申候小出播磨守殿片桐市正殿被仰渡候其様子者、寺中相統候様ニとの儀申渡ニ付而、慶長五年三月廿六日ニ御寺僧衆互ニ誓詞被仕、炎上以来之儀者、双方申分被相捨入魂して、翌日廿七日堂供養ニ惣中被罷出候事

一当年御寺領依被成御付、御寺中猶相改置日法度被申定、弥相究申候事

一炎上以来、秋野一分之以覚悟、公儀方ニ才覚被仕、今度、秀頼様諸堂被成御再興、如昔之成就仕候、就其式拾五ケ年之間、出仕寺役等一切不仕候寺僧面々被召出候儀、秋野合点仕候様ニ異見申候へとの御兩人御内證ニ候ツキ、寺中衆不残御太子様昼夜之勤行等無解怠様ニと秋野ニ申達候へ者、何様天王寺相立候御内證の儀、忝由被申而、双方申調、我等式迄大慶存候事

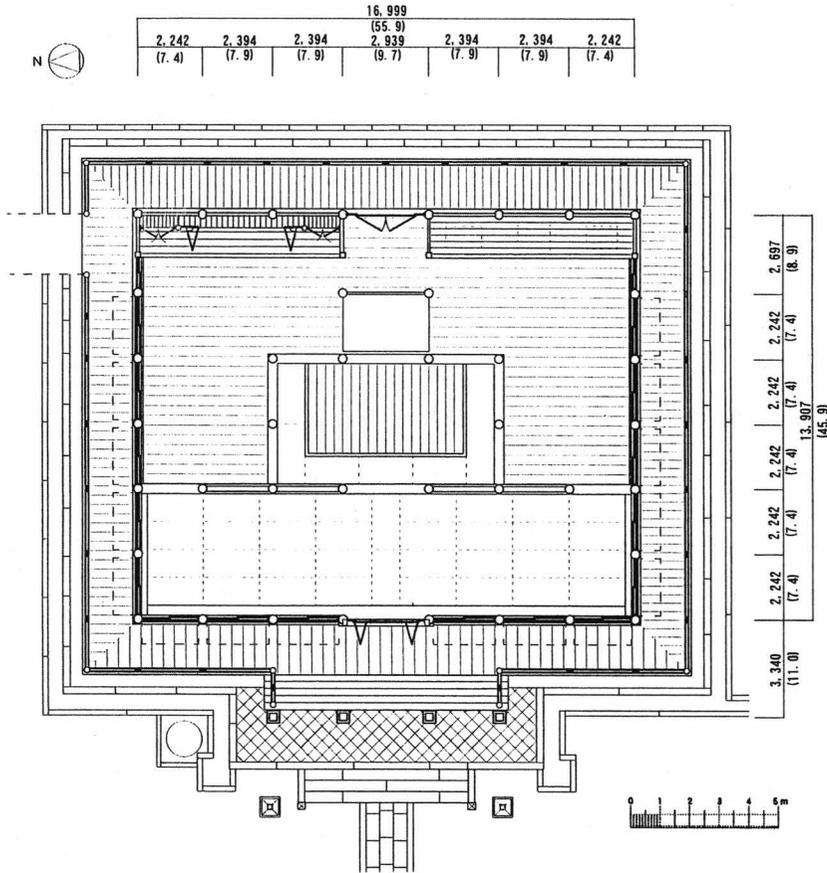
右條々、我等最眞偏頗心中聊以無之候、但老仕無分別者非私曲候、此段小出播磨殿内萩野玄沢、片桐市正殿内津田忠右衛門能々被存候、若少も偽於有之者、

慶長六辛丑年閏十一月二日 河村久目 杉山休意

秋野殿 岡之坊殿 寺僧中

『四天王寺古文書』より

この資料より、河村久目齋が四天王寺の復興にかかわっていた重要人物であることが確認できる。さらに慶長5年(1600)3月27日には堂供養が行われていることより、曼荼羅堂は建立後間もない時期に解体撤去を余儀なくされていたものと推定できる。そして10年後



第2図 禅林寺阿弥陀堂現状平面図

に禅林寺への寄付が決まったことになる。

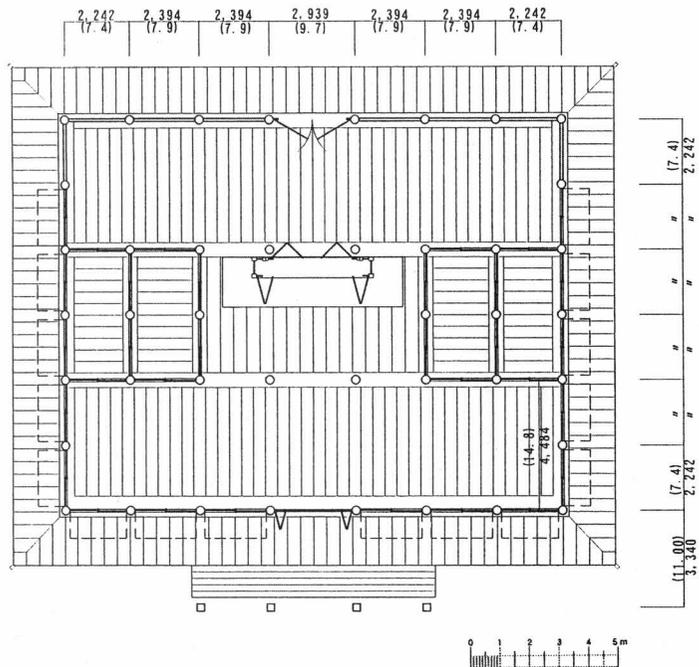
#### 4. 現存する阿弥陀堂の概要

阿弥陀堂は、境内東南の高台に位置し西面する。桁行7間、梁行6間の規模で、四周に高欄付縁を廻す。正面3間に向拝が付き、5級の木階を設ける。組物は平三斗、軒は二軒繁垂木、屋根は、入母屋造、本瓦葺である。

平面は、西側2間を畳敷きの外陣とし、その東側の桁行3間、梁行2間を内陣とする。さらに四天柱を建て、1間四方の内々陣を突出させ、須弥壇を置く。本来の浄土系寺院では内陣内部に須弥壇を造るのが一般的であるが、この点が大きく異なっている。さらに内陣の両脇桁行2間、梁行2間を板敷きの脇陣、東側2間も板敷きの後陣として、奥側両脇間3間分ずつに脇壇を造る。また北側の脇壇中央には、當麻曼荼羅を掛けた大型の厨子が組み込まれている。

正面中央間に両折棧唐戸を吊り、両脇3間と両側面の梁行5間まで半蔀戸を吊り、内側

には明障子を建てる。背面中央間には、両開板戸を吊る。内外陣境には、中央間と南北端間をのぞく4間に中敷居結界を設け、桁行7間にわたり吹寄菱欄間を嵌めているが、開放的で明るい空間構成となっている。建物の軸部、化粧垂木等は主にベンガラ塗とし、向拝組物、内陣等は、極彩色で飾られている。



第3図 禅林寺阿弥陀堂前身曼荼羅堂復原図

## 5. 復原調査

現状の阿弥陀堂には、多数の埋木等の痕跡があることより前身建物である曼荼羅堂の復原もある程度可能である。大きく2点のことが指摘できる。第1点目は、外陣―内陣・脇陣境や内陣―脇陣境に中敷居・鴨居痕跡の埋木があることより、格子戸が取り付けられた閉鎖的な建物であったと考えられる。

第2点目は、後陣の梁行方向の向かい合う柱に虹梁が取付いた痕跡があること、一方脇陣両脇2か所ずつにかかる虹梁は長さが足りず、他所からの移築が確認できることから、後陣に架かっていた虹梁を脇陣に転用したと推定できる。これは後陣を広げ、脇壇を新たに造るためと考えられる。また脇陣の虹梁が転用材であることより柱間中央に2本ずつの柱が必要となる。

さらに後世の改造として把握できるものは、縁高欄擬宝珠に万治3年(1660)の年紀があり、その時期まで高欄がなかったと考えられる。また、『年譜録』によると天保から弘化にかけて、銀23貫余りをかけ、屋根等の大修理が行われ、高欄擬宝珠4個も新調された。実際、天保14年(1843)の年紀のある擬宝珠が3個確認できた。また、外陣両端の海老虹梁が取り付けられたのも、絵様よりこの時の修理であると考えられる。

その後、明治10年(1877)に小屋組まで及ぶ屋根修理を行っている。平成16年に小屋裏の調査を行ったが、棟札等は発見できなかった。屋根本瓦は、近年葺き替えられており、鬼

瓦等も取り替えられている。

『年譜録』によると、江戸時代を通じて数回須弥壇廻りの彩色、金箔の修理を行っていて、現状彩色は補彩された痕跡が見受けられる。この彩色等については詳細な調査が必要で、それにより前身建物・禪林寺建立当初・後補の区別が可能と考える。

以上のことより第3図のような、前身曼荼羅堂の復原が考えられる。

## 6. 小結

阿弥陀堂は、慶長12年(1607)に四天王寺から移築・改修されたことが資料と部材痕跡から確認でき、禪林寺境内の成立過程を知る上で、また、京都市内に残る慶長年間の浄土宗本堂建築として大変貴重である。

また、四天王寺においても、秀頼が再興した伽藍は、慶長19年(1614)11月の大阪冬の陣のうちにすべて焼失しており、その後元和9年(1623)に徳川秀忠によって復興された伽藍も享和元年(1801)の落雷により主要建物のほとんどを失っている<sup>(注1)</sup>。このことより、前身建物である曼荼羅堂は、四天王寺の慶長復興以前の状態を伝える唯一の遺構として、当寺の歴史を研究する上でも重要である。

今後、また詳しい資料等が発見されれば、この建物の価値は益々高いものとなると考える。皆様方からの忌憚のない、ご意見・ご批判をいただければ幸いである。

(ひらい・としゆき、こみや・あつし、いなだ・ともよ  
= 京都府教育庁指導部文化財保護課)

注1 四天王寺では、現在以下の建物等が重要文化財に指定されている

四天王寺鳥居 1基 永仁2年

四天王寺 本坊西通用門(元薬師堂の西門、明治45年頃現在地に移転)・本坊方丈(元湯屋方丈、文化11年移築)・五智光院(明治34年に移築)・六時堂(元権寺薬師堂、文化8年移転改修)・元

三大師堂・石舞台 6棟 元和9年

## 参考文献

京都永観堂禪林寺古文書 株式会社文化学院 平成4年

禪林寺誌 法蔵館 大正2年

本山禪林寺年譜録 禪林寺蔵

「禪林寺蔵当麻曼荼羅の軸木銘について」(『仏教芸術』毎日新聞社)1979年、82ページ

四天王寺古文書 清文堂出版株式会社 1996年

寺地画図 京都府総合資料館蔵 明治4年

都名所図会 卷三 安永9年

第1表 京都府内の国宝・重要文化財の内、移築された建造物

	社寺名	種類	建物名	移動時期	旧所在	旧所在地での 建立年代	備考
1	大徳寺	国宝	唐門	慶長8年	聚楽第蒲萄門	天正	明治31年 まで興臨院 総門。再移 転
2		重文	勅使門	寛永17年	慶長度内裏西唐門	慶長	
3		重文	待真寮		御所局	室町後期	※
4	孤篷庵	重文	本堂	寛政9年	雲林院客殿		
5	南禅寺	重文	方丈	慶長	天正度内裏	天正	※
6		重文	勅使門	寛永18年	慶長度内裏日御門	慶長	
7	二条城	重文	本丸 御 殿玄関	明治27年	桂宮	弘化4年	
8		重文	本丸 御 殿御書院	明治27年	桂宮石薬師御殿	寛政2-5年	
9		重文	本丸 御 殿御常御 殿	明治27年	桂宮	嘉永2年	
10		重文	本丸 御 殿台所及 び雁之間	明治27年	桂宮	弘化4年頃	
11	妙法院	重文	大書院		元和造営女御御所	元和5年	
12		重文	玄関	寛永17年頃			
13	建仁寺	重文	方丈	文禄	安芸安国寺	文明19年	
14	教王護国寺	重文	南大門	明治28年	蓮華王院門	慶長6年	
15	愛宕念仏寺	重文	本堂		上京弓箭町	文保2年	
16	大覚寺	重文	宸殿		元和造営女御御所	元和5年	※
17	仁和寺	国宝	金堂	寛永20年頃	慶長内裏紫宸殿	慶長18年	※
18		重文	御影堂	寛永20年頃	慶長内裏清涼殿	慶長	※清涼院の 部材を利用 か
19		重文	玄関門	寛永20年頃	慶長内裏西御台所門	慶長	
20	玉鳳院	重文	開山堂	天文7年頃	東福寺建物	室町中期	
21	龍安寺	重文	本堂	寛政年間	西源院本堂	慶長11年	
22	醍醐寺	国宝	金堂	慶長5年	紀伊湯浅	平安後期	
23	法界寺	重文	本堂		大和伝燈寺	康正2年	
24	勸修寺	重文	書院	元禄10年		江戸中期	
25	本圀寺	重文	経蔵	昭和54年	下京区	慶長12年	
26	旧岡花家住宅	重文		昭和47年	船井郡瑞穂町	江戸中期	
27	妙喜庵	国宝	待庵			天正	
28	松尾神社	重文	本殿				
29	浄瑠璃寺	国宝	三重塔	治承4年	一条大宮	平安後期	

凡例：種類の重文は重要文化財を示す。備考の※は用途の変更が大きい建造物を示す



写真1 禪林寺阿弥陀堂外観(正面)



写真2 禪林寺阿弥陀堂外観(側面)

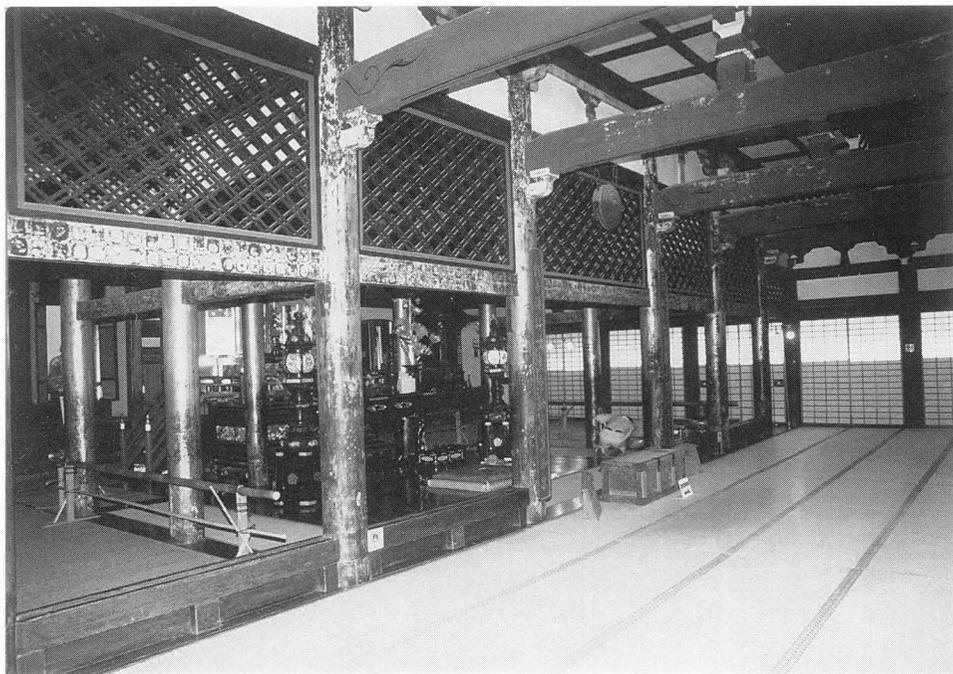


写真3 禅林寺阿弥陀堂内部（外陣から内陣を見る）

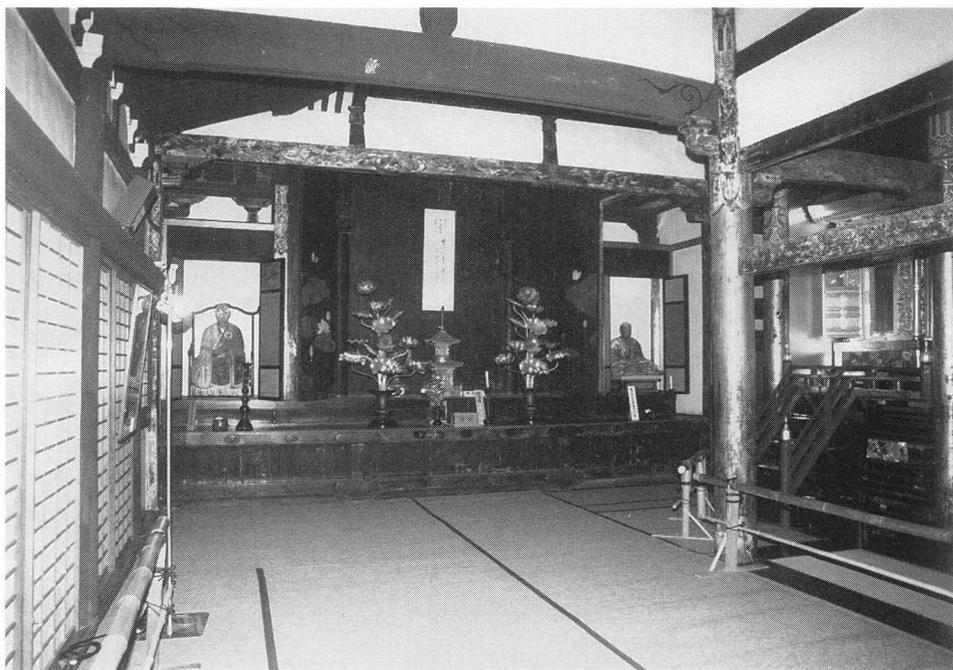


写真4 禅林寺阿弥陀堂内部（脇陣から後陣脇壇の當麻曼荼羅の厨子を見る）